

グローバル教育尺度開発の試み 小・中・高校教師による児童・生徒への獲得期待

著者	武田 明典, 澁谷 由紀, 小柴 孝子
雑誌名	Global communication studies = グローバル・コミュニケーション研究
号	5
ページ	127-147
発行年	2017-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001425/

〈研究論文〉

グローバル教育尺度開発の試み
——小・中・高校教師による児童・
生徒への獲得期待——

武田 明典、澁谷 由紀、小柴 孝子

Development of a Global Education Scale:
Primary and Secondary Education
Teachers' Expectations for their Students to
Acquire Skills as Globally Competent
Individuals

Akenori TAKEDA, Yuki SHIBUYA, Takako KOSHIBA

The purpose of this study is to develop a multi-dimensional scale for the measurement of primary, high school teachers' perspectives on global awareness and attitudes toward global education. A survey was conducted in March 2016, in which a questionnaire with 80 items was administered to 254 teachers. An exploratory factor analysis using the data of 229 teachers (74 primary schools, 71 junior high schools, 84 high schools in Chiba prefecture) was executed. The results indicated that the scale had 6 sub-scales: comprehensive communication skills, foreign language proficiency, IT skills, creativity, Japanese identity, and ability to execute tasks. Internal reliability as a global education scale was examined. The findings have clarified the meaning of global education for the primary, junior and senior high school teachers and revealed the multidimensional nature of global education. It is suggested that further examination will be needed to verify the appropriateness of the scale.

キーワード： グローバル教育、グローバル人材、尺度開発、初等教育、中等教育

1. はじめに

近年、世界の国々におけるグローバル化社会への移行のもと、日本においてもその躍進が求められている。文部科学省の推進のもと、学校教育においてもグローバル教育の重要性がうたわれている。グローバル化社会で日本が躍進するためには、まず教育の担い手である教師が児童・生徒に対してどのようなスキルや能力を備えさせるかという問題意識を持っているかを把握することは先決である。日本がグローバル化社会へさらなる躍進を果たしていくために、学校教育段階から教師による児童・生徒への意識づけが重要であるといえる。

文部科学省は、学校や大学教育におけるグローバル人材育成教育を推進している。2013年6月には、「第2期教育振興基本計画」が閣議決定された。「第2期教育振興基本計画」のグローバル人材育成では、日本人としてのアイデンティティや日本の文化に対する深い理解を前提として、1)豊かな語学力・コミュニケーション能力、2)主体性・積極性、3)異文化理解の精神などを身につけて様々な分野で活躍できることを重要としている。主な取組としては、小・中・高等学校を通じた英語教育の強化、海外留学の促進、英語教員の指導力の向上、高校・大学等の国際化のための取組の支援、国際的な高等教育の質保証の体制や基盤の強化等を取り上げている。また、生徒や教員の英語力の目標について、具体的な成果指標を示している。

さらに、2014年9月「英語教育の在り方に関する有識者会議」の報告書では、具体的施策が次のように示されている。1)小学校中学年から外国語活動を開始し、コミュニケーション能力の素地を養う。2)高学年では、コミュニケーション能力の基礎を養うため、学習に系統性を持たせるための教科として外国語教育を実施する。3)互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を中心とする授業を行うため、中・高等学校では、生徒の理解の程度に応じて、授業を英語で行うことを基本とする。4)「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を通じて「英語を使って何ができるようになるか」という観点から、学習到達目標を設定(例:成果達成項目のCAN-DOリスト形式)し、指導・評価方法を改善する。5)4技能を測定する資格・

検定試験を活用する。6) ALT (Assistant Language Teacher) や ICT (Information and Communication Technology) の効果的な活用をする等である。

それに引き続いて、文部科学省(2016)の2015年度「英語教育実施状況調査」では、具体的な施策の状況について調査し、次期学習指導要領の改訂や今後の施策の検討に資するとともに、各都道府県等における英語教育の充実や改善等に役立てるため、「英語教育実施状況調査」の結果を公表している。中学校第3学年に所属している生徒のうち、英検3級以上を取得している生徒は18.9%で、2014年度の18.4%から0.5ポイント上昇している。「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学校については51.1%で、2014年度の31.2%から19.9ポイント上昇している。

また、高等学校第3学年に所属している生徒のうち、英検準2級以上を取得している生徒は11.5%で、2014年度の11.1%から0.4ポイント上昇している。「CAN-DOリスト」により学習到達目標を設定している学科は69.6%で、2011年度の4.0%から65.6ポイント上昇、2014年度の58.3%から11.3ポイント上昇している。

続いて、教師のグローバル教育や国際理解教育と関連する意識調査を概観してみると、研究数が少ないことがわかる。教師の国際理解教育やグローバル教育についての研究では、矢嶋・一場・川島・鈴木・西村(2003)による「教育現場における国際化の導入状況と教員の国際化教育に関する意識調査」、米田・岡崎・高尾(2006)の「現場教師を対象とした国際理解教育の実態調査」、武(2010)の「グローバルな視野育成の授業実践に対する認識：日本の中学校教師を焦点に」、杉村(2013)の「多国籍化する小中学校における国際理解教育の現状と課題」、八王子市民活動推進部国際交流課(2013)の「国際理解教育に関するアンケート調査報告書」、そして、ベネッセ教育総合研究所グローバル教育研究室(2016)の「中高の英語指導に関する実態調査2015」等が取り上げられている。

また、国際理解教育に必要な資質・能力についての研究で、大津(2006)は、技能目標として、「コミュニケーション能力」、「メディアリテラシー」、「問題解決能力」を指摘し、態度目標として、「人間としての尊厳」、「寛

容・共感」、「参加・協力」をあげている。

日本学校教育学会「グローバル時代の学校教育」編集委員会・多田ほか(2013)は、グローバル時代の教育課題として、「多様な他者との共存」、「地球的課題の相互依存関係」、「連鎖性」、「複雑性」等に対応できる「行動的市民像」の育成を求めている。さらに、前田・西村(2013)は、グローバル社会時代に求められる現職教員が考える資質・能力として、姿勢・態度から、「コミュニケーション能力」、「言語力」、「問題解決能力」、「思考・判断・表現力」、「情報活用能力」、技能の視点から、「共生」、「異文化に関する興味・関心」、「たくましさ」、「相手意識」、「貢献」などを示している。他にも、魚住(2006)、石森(2010)がある。

近年、文部科学省が日本の学校教育においてグローバル教育に重きを置いていることは明確である。しかしながら、それらを総括した構成要素について実証的な研究は、あまり見受けられない。グローバル化社会で活躍する人材育成において、グローバル教育の担い手である教師は現段階で、「グローバル教育」をどのようにとらえているのか、また、それをどのように学校教育において展開しようとしているのかに関しては、まだ明確化されていないとは言えない。

このような現状の中で、グローバル教育についての教師のニーズや問題意識を効果的に想定していくツールを開発することは、今後の研究の基礎となる重要な契機ともなり得るであろう。本研究では、グローバル教育に関する教師向けの尺度開発を行い、それに基づいた児童生徒のスキル・能力の獲得期待を検討する。

2. 目的

本研究は、児童・生徒に対しての教師が理想とするグローバル人材としての資質・能力の獲得期待に関連する項目を特定するために、小・中・高等学校の教師を対象に予備・本調査を質問票調査により実施し、グローバル教育の測定尺度を開発し、その開発された尺度に基づき学校種、性差、経験年数などを比較検討することにより、今後のグローバル教育に関する教育内容を検討することを目的とする。

3. 方法

3.1. 概念形成：97 項目の尺度素案

グローバル人材育成教育についての文部科学省資料、新聞記事、書籍（河合・石井、2002; 徳永・舂井、2011）、および、調査研究を参考に、総合的な構成要素からなるグローバル教育について著者らが検討を行った。その結果、7つの構成要素に分類し、各々、“...することができる”、“...できている”というように、質問紙項目に適合するような統一表記体で、かつ、全て逆転項目を設けずに、合計97項目を創設した（Appendix 1 参照）。

調査の前段階における7つの具体的な構成要素の命名、および、具体的な項目をあげる。1) 国際感覚・異文化理解（例：異文化に対する寛容的態度；異文化への興味関心）；2) 日本人のアイデンティティ（例：日本人としての誇りを持つ；日本の伝統・習慣を大事する）；3) 語学力・コミュニケーション・スキル（例：外国語で自由に討論できる；共感的な態度で他人の話を聴くこと）；4) 知識・教養・思考（例：幅広い教養；クリティカルシンキングの態度で物事を分析）；5) 創造性・遂行力（例：個性的発想力；目標を設定し、達成に向けて着実に進む）；6) リーダーシップ・協調性（例：協力して物事を遂行する力；積極的に物事に取り組む）；7) 情報機器操作（例：IT 機器の基礎知識の習得；コンピュータ操作）、以上である。

3.2. 予備調査

予備調査は2016年1月に、小学校、中学校、高等学校の教員71名を対象に無記名式の質問票調査を実施した。学校種や性別などのフェース・シートに続いて、97項目に対する5件法（「あてはまる」、「どちらかという」とあてはまる」、「どちらともいえない」、「どちらかという」とあてはまらない」、「あてはまらない」）（最大値5、最小値1）への回答を求めた。また、児童・生徒に獲得期待するグローバル人材能力についての自由記述式欄を設けた。これらの結果、項目分析を経て97項目から80項目が精査され、これを本調査用の質問紙にレイアウトした。

3.3. 本調査

3.3.1. 本調査の目的

教師による児童・生徒に対する教師のグローバル人材としての資質・能力獲得期待に関連する項目を特定するために、小・中・高等学校の教師を対象に予備・本調査を質問票調査により実施し、グローバル教育の測定尺度を開発することを目的とする。

3.3.2. 本調査の対象者

本調査は2016年2・3月、小・中・高等学校教師に対して、予備調査とは異なった対象者に対して、千葉県A市教育委員会、および、高等学校については学校長の承諾を経たうえで各学校において実施依頼し、後日、回収を行った。

調査対象者は、千葉県内の小・中・高等学校教師で、2016年3月中旬から下旬に千葉県内の小学校3校、中学校3校、高等学校3校の254名の教員から協力を得た。調査用紙は、A市教育委員会の承諾のもと、質問紙を各学校に郵送し、教務主任に質問紙用紙の回収を依頼し、さらに、返信用封筒への配送を願う、あるいは、著者らが回収のために学校訪問を行い、回収した。

これら質問紙のうち、1) フェース・シート欄における未記入箇所が1箇所でもあったもの、2) 5件法の評定箇所につき1つでも欠損があったもの、3) 1ページ分、全て同評定を行っているものなどの回答に不備のあったものを除き、最終的な分析対象としたのは小学校74名、中学校71名、高等学校84名の合計229名(男性122名; 女性107名)であった。教師勤続年数は、10年未満: 98名、10-20年未満: 32名、20-30年未満: 45名、そして、30年以上: 54名であった。

3.3.3. 本調査の内容

予備調査で用いた97項目から平均値が極端に大きい“天井効果”の7項目、および、平均値が極端に小さい“フロア効果”の10項目を除外した80

項目を本調査用の調査票項目とした。質問紙は3部構成で、冒頭に調査研究の倫理面や連絡先などを記入したうえで、1) 性別・学校種・教師経験年数などを問うフェース・シート；2) 80項目の本尺度；3) 構成要素の中で特に重要と考えられる“コミュニケーション”について藤本・大坊（2007）による標準化された20項目の“コミュニケーション・スキル尺度”から成り立っていた。

ここで、グローバル教育に関しては様々な構成要素が考えられるが、これらのうちで、特に重要だと著者らが考えたのは、コミュニケーション・スキルと外国語の運営能力であった。このうち、日本における尺度として標準化されたものはこのコミュニケーション・スキル尺度であったため、また、今回のグローバル教育の本調査と標準化されたコミュニケーション・スキル尺度との相関をみることにより、併存的妥当性を検証することが可能になるため、これら2つの理由により、本調査と並行してコミュニケーション・スキル尺度の調査を行った。なお、オリジナルのコミュニケーション・スキル尺度は7件法であったが、本調査のグローバル教育尺度は5件法に定めたため、両尺度の評定の統一を保つため藤本の許可を得たうえで、コミュニケーション・スキルも5件法に改変して実施した。

4. 結果

4.1. グローバル教育尺度作成のための因子分析と構成した尺度の信頼性

予備調査の結果から得られた尺度80項目の調査票で欠損値のある回答を除いた229名（有効回答数）を分析の対象とした。統計処理については、固有値の変化と因子解釈の可能性、スクリー・プロットの状況を考慮し、当初4～8の想定される因子を試行的に検討した結果、6因子構造が妥当であると考え、6因子を仮定し因子分析（主因子法、Promax回転）を行った。ここで、因子負荷量が1つの因子について.35以上で、かつ2因子以上に重複して.35以上を示さない48項目を選出した。これらのプロセスを得た回転後の因子負荷量と因子間相関および基本統計量をTable 1に示した。グローバル教育尺度の各項目の冒頭の表記番号は、質問紙上の項目番号で

ある。以下、6因子について説明する。

抽出された6因子のうち、第1因子は23項目で構成されており、「相手によって臨機応変に対応することができる」「他人の意見を聞くことができる」「相手の立場や気持ちを考えて話すことができる」「他者への気配りができる」「他者とのコミュニケーションを大切にできる」「文化、価値観、考えの違いを当然と受け止められる」などに対して負荷量が高く、「総合的コミュニケーション力」に関する因子と命名・解釈された。この因子の信頼性係数(α 係数)は、.95と、かなり高かった。

第2因子は12項目で構成されており、「海外でボランティアをする」「外国語を使ってスピーチできる」「英検などを積極的に受けることができる」「外国語で尋ねられたことに対して、適切に応答することができる」などに対して負荷量が高く、「外国語運用能力」に関する因子と考えられ、 α 係数は、.93と高かった。

第3因子は6項目で構成されており、「コンピュータ操作ができる」「効果的にソフトを上手く使いこなすことができる」「コンピュータ操作が苦手なものに分かり易く説明できる」などに対して負荷量が高く、「ITスキル」に関する因子とした(α 係数は .91)。

第4因子は3項目で構成されており、「ユニークな発想を展開することができる」「個性的な発想を持っている」「新しいアイデアをよく思いつく」に対して負荷量が高く、「創造性」に関する因子と解釈された(α 係数は .78)。

第5因子は2項目で構成されており、「世界で活躍する日本人を見て誇りに思える」「海外で活躍している日本人を知っている」に対して負荷量が高く、「日本人としての自覚」(α 係数は .62)であり、信頼性係数はあまり高くはなかった。

第6因子は2項目で構成されており、「思いついたことはすぐに実行に移す」「グループで活動する時はリーダーシップを発揮する」に対して負荷量が高く、「実行力」に関する因子と考えられた(α 係数は .47)であった。

しかしながら、下位尺度の第5因子(「日本人としての自覚」、および、6因子(「実行力」)については、項目数が2項目と少なかったことから、ま

グローバル教育尺度開発の試み

Table 1 グローバル教育尺度の基本統計量と因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

	項目	M	SD	F1	F2	F3	F4	F5	F6
I-47)	相手によって臨機応変に対応することができる	4.09	.790	.831	-.160	-.043	-.056	.240	-.078
I-24)	自分の意見と他人の意見を聞くことができる	4.35	.750	.812	-.107	.091	-.004	-.054	-.106
I-17)	相手の立場や気持ちを考えて話すことができる	4.28	.834	.775	.062	.000	-.002	-.109	.045
I-42)	他者への気配りができる	4.25	.757	.764	-.128	.029	.207	-.035	.011
I-54)	他者とのコミュニケーションを大切にす	4.30	.738	.762	.017	-.083	-.067	.110	.033
I-79)	文化、価値観、考えの違いを当然と受け止められる	4.23	.797	.754	.136	-.073	-.290	.229	-.167
I-37)	他の人に自分の考えをわかりやすく説明できる	4.14	.852	.742	.077	.120	.021	-.158	-.064
I-35)	他人からの指摘を素直に聞き入れて改めることができる	4.14	.775	.722	-.017	-.072	.132	-.040	-.201
I-11)	洞察的な態度で考えることができる	4.00	.891	.721	-.090	.064	.008	-.047	.239
I-2)	与えられたテーマについて自分の意見・主張を話すことができる	4.27	.911	.681	-.113	.157	-.048	-.057	.133
I-7)	異文化に対して寛容的な態度で接する	4.32	.847	.672	.238	-.250	-.054	-.064	.146
I-66)	状況に応じてコミュニケーション手段(メール・電話・口頭等)を使い分けることができる	4.16	.775	.651	-.116	.093	.165	.178	-.107
I-48)	たくさんある情報の中から、自分の必要とする情報を取捨選択できる	4.21	.798	.643	.035	.090	.062	.054	-.008
I-45)	伝言や手紙などを読んで、その内容に合わせて適切に応じることができる	3.99	.749	.622	.034	-.033	.138	.083	-.046
I-65)	間違えることを恐れずに自分の考えを話すことができる	4.05	.870	.607	.200	-.075	.147	-.083	.040
I-12)	郷土への愛着を持つ	4.09	.854	.589	.057	-.072	-.226	.262	.168
I-64)	自国と他国を比較した際に、他国のことも尊重する	4.09	.854	.547	.299	-.143	-.051	.243	-.071
I-27)	論理的思考ができる	3.95	.862	.529	.016	.178	.050	-.050	.156
I-21)	相手や状況によってメールの内容や表現を適切に使い分けることができる	4.12	.878	.521	-.197	.200	.254	.056	-.028
I-33)	初対面の人にも自分から話しかけることができる	3.83	.852	.514	.062	-.064	.006	.186	.178
I-4)	いろいろなことを学習することを好む	4.14	.833	.489	-.014	.116	.049	-.034	.241
I-34)	日本語運営能力を備える	3.65	.899	.439	.237	-.017	.099	-.021	-.043
I-41)	日本的な思考を心がける	3.64	.834	.358	.055	-.097	.272	.071	.021

I-59)	海外でボランテイアをする	2.77	1.140	-0.079	.895	-1.27	.001	.017	.090
I-16)	外国語を使ってスピーチできる	3.04	1.404	.182	.788	.078	-0.049	-0.230	-0.061
I-71)	英検などを積極的に受けることができる	3.03	1.192	-0.080	.758	.152	-0.004	.106	-0.128
I-73)	外国語で尋ねられたことに対して、適切に応答することができる	3.25	1.234	.117	.736	.194	.017	-0.174	-0.157
I-39)	外国のニュースの概要や要点を聴き取ることができる	3.33	1.152	.191	.725	.046	.024	-0.195	-0.077
I-15)	開発途上国支務を主な業務とする組織の職員として働く	2.85	1.074	.006	.656	-0.009	.024	-0.111	.268
I-78)	海外に観光旅行に行くことがある	3.32	1.119	-0.268	.631	.118	-0.045	.246	.147
I-18)	外国の歌を原曲で歌うことができる	2.77	1.174	-0.027	.627	-0.127	.226	-0.053	-0.046
I-13)	外国人を道案内できる	3.55	1.133	.247	.624	.090	-0.114	.033	-0.072
I-62)	外国で買い物することができる	3.34	1.131	.083	.554	.065	-0.047	.279	.031
I-68)	外国の映画を見てあらすじを説明できる	3.24	1.050	-0.187	.540	.025	.248	.221	.019
I-51)	街中で困っている外国人がいたら、援助しようと思いがける	3.82	.947	.213	.532	-0.074	.107	.061	-0.000
I-55)	コンピュータ操作ができる	3.89	.889	-0.001	-0.051	.844	-0.026	.100	-0.025
I-9)	効果的にソフトを上手く使いこなすことができる	3.56	.988	.055	-0.066	.816	-0.049	-0.113	.071
I-5)	コンピュータ操作が苦手な者に、分かり易く説明できる	3.53	1.078	.040	.017	.799	-0.100	-0.025	.092
I-31)	IT機器の基礎知識を習得できる	3.78	.994	.004	.109	.785	-0.007	.002	-0.018
I-72)	コンピュータを活用し他者へ情報を発信できる	3.50	.981	-0.065	.095	.702	.062	.140	-0.158
I-77)	プレゼンテーションを行う際に情報機器を活用することができる	3.75	.993	-0.053	.141	.699	.011	.127	-0.031

グローバル教育尺度開発の試み

I-20)	ユニークな発想を展開することができる	3.72	.842	.104	.039	.002	.690	-.055	.169
I-38)	個性的な発想を持っている	3.69	.844	.051	.159	-.099	.631	-.094	.165
I-69)	新しいアイデアをよく思いつく	3.48	.896	.083	.065	.056	.456	.182	.309
I-76)	世界で活躍する日本人をみて、誇りに思える	4.05	.765	.248	-.096	.053	-.087	.657	.035
I-70)	海外で活躍している日本人を知っている	3.53	.930	-.117	.229	.106	.207	.438	.145
I-8)	思いついたことはすぐに実行に移す	3.54	.861	-.031	-.030	-.084	.294	.088	.581
I-3)	グループで活動するときにはリーダーシップを発揮する	3.56	.923	.277	.016	.180	.029	.015	.421
<hr/>									
			F1	F2	F3	F4	F5	F6	
α 係数		.954	.927	.912	.784	.617	.469		
<hr/>									
因子間相関		F1	F2	F3	F4	F5	F6		
	F1		.675	.547	.585	.432	.468		
	F2			.619	.554	.464	.376		
	F3				.461	.396	.297		
	F4					.419	.478		
	F5						.291		
	F6								

た、信頼性係数も高くはないことから、グローバル教育尺度の下位尺度として扱うことを控えることにした。

4.2. 平均値の差の測定

因子分析の結果から得られたグローバル教育尺度の4つの下位尺度である「総合的コミュニケーション力」「外国語運用能力」「ITスキル」「創造性」の合計得点と属性間の差の検定について、学校種と教師経験年数の差を検討するために、グローバル教育尺度の各下位得点を従属変数とし、学校種(小・中・高等学校)と教師勤続年数(10年未満、10-20年未満、20-30年、30年以上)を独立変数とした分散分析を行った。

その結果、学校種別の影響は「創造性」尺度においてのみ、有意であった[F(2, 226) = 3.626]。Tukey法を用いた多重比較(5%水準)を行ったところ、小学校群の平均値が高等学校群より有意に高いことが明らかになった(Table 2)。教師勤続年数については、平均値はほぼ同等であり有意差は認められなかった。

また、性別による各下位尺度得点の平均値を比較するためにT-testを行った(Table 3)結果、0.01%水準で有意差が見られ、「総合的コミュニケーション力」尺度[t(227) = -3.869, p < .001]、「外国語運用能力」尺度[t(227) = -3.802, p < .001]であった。この結果と平均値を見ると、女性教師は男性教師よりも「総合的コミュニケーション力」「外国語運用能力」に対する児童・生徒への獲得期待が高いと解釈することができる。

4.3. コミュニケーション・スキル尺度との相関

最後に、本尺度と標準化された藤本・大坊(2007)のコミュニケーション・スキル尺度との相関を見るために、本尺度のメイン因子であり、かつ、当初の概念構成の段階からも関連性が一番高いことが予想された第1因子の「総合的コミュニケーション能力」は、ある程度の相関がみられた(Spearman $\rho = .701$, p < .001)。このことにより、一部の因子ではあるものの、本尺度の妥当性はある程度、支持されたと考えられる。

Table 2 学校種による分散分析結果

	小学校 (n=74)		中学校 (n=71)		高等学校 (n=84)		
	M	SD	M	SD	M	SD	F 値 多重比較
F1: 総合的コミュニケーション力	96.85	13.528	93.38	13.055	93.25	13.402	1.768
F2: 外国語運用能力	39.93	10.939	38.59	10.511	36.69	9.973	1.923
F3: IT スキル	22.49	4.930	21.70	4.794	21.86	5.099	.518
F4: 創造性	11.30	2.188	11.06	1.843	10.42	2.309	3.625* 小学校 > 高等学校

* $p < .05$; $df (2,226)$

Table 3 性別による平均値の差の検定 (T-test)

	男性 (n = 122)		女性 (n = 107)		
	M	SD	M	SD	t 値
F1: 総合的コミュニケーション力	91.34	13.129	98.00	12.828	- 3.869***
F2: 外国語運用能力	35.93	10.527	41.07	9.824	- 3.802***
F3: IT スキル	21.59	4.929	22.50	4.934	- 1.386
F4: 創造性	10.66	2.052	11.18	2.252	- 1.823

*** $p < .001$, $df = 227$

5. 考察

第一に、尺度に関して振り返ると、最終的な有効回答は229名であり、ここから、5～7因子を想定し、因子分析(主因子法; Promax回転)を行い、最終的に、6因子、48項目が抽出された。また、既存の“コミュニケーション・スキル尺度”は、オリジナルのままの20項目全てを含めて分析し、1因子が得られ、 α 係数は.76であった。さらに、本尺度の第1因子との相関はやや高く($rho = .701$)、ここから、部分的ではあるものの、尺度の主要要素である“コミュニケーション面”での妥当性が支持されたと考えられる。しかしながら、本グローバル教育尺度全体の6因子のうち、第1因子は23項目と尺度全体の大半を占め、また、第5・6因子は、各々、項目数が2個と少ないため、下位尺度としての扱いを控える必要があると考えられる。

以上より、第5・6因子に関する因子構造面の課題点はあるものの、本研究の成果となるグローバル教育尺度は信頼性と妥当性の検証を得た標準化プロセスを得ているので、一定の評価はできるものと考えられる。したがって、“グローバル教育尺度”として暫定的に本尺度の命名を行い、以下の考察を進める。

本研究は、課題をも含む“試作段階”のグローバル教育尺度であった。グローバル人材の概念には幅広い要素が含まれ、その資質・能力は単一の尺度で測ることは困難である。このようななか、本研究では、文部科学省のグローバル人材の概念を反映する具体的な表記や項目が少なかったため、これらの概念を具体化させたいというねらいを含んでいた。

因子分析の結果から、「総合的コミュニケーション尺度」と「外国語運用能力尺度」が整理されてとらえることができ、また、教育現場におけるグローバル人材のための教育の資質として「ITスキル」「創造性」が重視されていることなどが明らかになった。尺度について総括すると、小・中・高等学校の教員を対象としたグローバル教育尺度を開発するための予備的な尺度の作成を試み、その信頼性と妥当性の検証のプロセスを経たことにより、今後のグローバル教育に関する研究においては、一定の成果が得られたといえる。

第二に、本尺度の概念形成に関して考察する。これは、本研究の土台となる重要なプロセスであったといえる。「問題」箇所では、教師の“国際理解教育”と“グローバル教育”の2つの用語を使用した。が、学校現場では、この2つの用語の定義や区別が曖昧なところがあり、議論をされているところである。しかしながら、“グローバル”という包括的概念は、各国々の社会状況や時代の影響を強く受けているといえる。特に資源が乏しく輸出入が盛んである我が国においては、グローバル化の影響からは逃れられず、また、各人がそれを取り入れるかどうかを意識しているかどうかにかかわらずに、自然と、適応すべき重要な態度・スキルではないかと考えられる。

したがって、“グローバルな視点”や“グローバルな人材”、そして、それらを育成するための“グローバル教育”は、社会に生きていく上では必要不可欠な要素であり、バブル崩壊後の“失われた20年”と言われている日本においては、国家戦略的にも重要な教育内容であるといえる。特に、これらの時代を生き抜く青年においては、グローバルな社会に適合していくための諸種のスキルや態度を身につけていくことは、他国とサバイバルしていくうえで、あるは、IT化により、人工知能やロボットとの職業上でのライバル関係になることが予想されているこれからの社会においては必要不可欠な要素であろう。

このように、グローバルの意味する構成要素は、まさに現代社会を生き抜くための総合的なスキル・態度であるともいえるのではないだろうか。このグローバルという概念をコンパクトに収めた尺度を開発することは、当初から困難で意欲的なことであった。包括的かつコンパクトなグローバル教育尺度を開発することにより、今後、各学校で本尺度を活用することにより、教師の課題意識を理解し、また、意識を高められるというメリットが予想される。開発段階である本尺度について、著者らの概念構成段階に遡り、Appendix 1 のリスト項目の段階に遡り、これらを参考にした研究者のさらなる検討が重要であると考えられる。

最後に、完成された尺度による学校種比較と性別比較について述べる。今回の調査テーマは異なるが、次に紹介する2つの研究は、今回の調査と

同時期～1年位の差という類似した時期であり、かつ、一部、同一市で行い、なかには、重複した学校も含まれていた。これらの調査は、1) 新免許更新講習のニーズ調査(小柴・武田・村瀬、2016)、および、2) 道徳教育の教科に関する調査(小柴・村瀬・武田、2017)であり、部分的な項目ではあるが、今回と同様に統計学的な有意差が見られた。

小・中・高等学校の学校種比較では、「結果」Table 2のように、高等学校よりも小学校教員の方が高かったが、一般的に、教育の諸テーマに関して、小学校教員は問題意識が高い傾向にあるのであろうか。また、「結果」Table 3で示したように、女性の方が男性よりも“コミュニケーション面”や“言語面”に関して高い得点、つまり、必要性を強く感じていることは、興味深い。このことは、脳科学科学的にもコミュニケーションや言語面で優位性があることも起因しているのであろうか。学校種や性差に関しては、他の研究から得られた結果とともに今後、さらなる検討が必要である。

6. 今後の課題

前述の「考察」で述べたように、本研究はグローバル教育に関する“試作段階”での尺度開発であったため、さらなる研究が重要になってくる。今後の課題点を3つにまとめると：1) 質的研究からのアプローチ；2) 当初の概念形成段階からの質問項目の再検討；3) 調査対象者数を増やして再実施などがあげられる。

具体的に述べると、1) は、今回予備調査での自由記述欄の記入者が20名と少なく、また、20名のうちでは短文の記述が多かった。教員がこれからのグローバル教育に関してどのような具体的な課題意識を持ち、それを克服しようとしているのか等、インタビュー調査を行うことが望ましい。

2) については、考察で述べたように、そもそも概念形成は困難であったという問題を含んでいた。今回の調査では、著者らは心理学や社会学オリエンテーションであったが、今後は異なる学問領域の研究者による複眼的な視点により、また、現段階で著者らの調べた限りではグローバル教育やグローバル人材に関する研究は少ないため、これから報告されていくことが予想される諸研究を鳥瞰するメタ分析を行うことにより、グローバル教

グローバル教育尺度開発の試み

育に関する構成要素や教育のために必要な方法を明らかにしていくことが重要である。

3) は、今後、サンプル数を増やし、また、調査の対象者を教師だけではなく、教育の受け手である大学生や高校生を対象とした調査を行うことにより、グローバル教育に関する教授者と学習者との立体的な検証が可能となるであろう。さらに、高校生や大学生に対して、本尺度を記名式で実施し追跡調査が可能な状態になるように入学時と卒業前の事前・事後モデルの縦断的な調査を行うことにより、高校や大学のカリキュラムとも連動したグローバル教育に関するスキル・態度の獲得が検討できるであろう。

このように、本尺度の改善や汎用性について今後のさらなる研究が期待される。

謝辞

本研究にご協力いただきました千葉県船橋市教育委員会、市内小・中学校、および、県立高等学校長・教職員、以上の皆様に御礼申し上げます。

付記

本研究は本学グローバル・コミュニケーション研究所の研究助成を受けた。

参考文献

- 石森広美 (2010) 「高校のグローバル教育におけるアセスメント指標の開発的研究」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』59 集、1 号、357-378 頁
- 魚住忠久 (2006) 「グローバル教育とは」日本グローバル教育学会編『グローバル教育の理論と実践』教育開発研究所、29-32 頁
- 大津和子 (2006) 「グローバル時代における国際理解教育の目標」『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発における理論的・実践的研究』第 1 分冊 (研究代表: 多田孝志)、科学研究費補助金研究成果報告書、15-25 頁
- 河合隼雄・石井米雄 (2002) 『日本人とグローバリゼーション』講談社
- 小柴孝子・村瀬公胤・武田明典 (2017) 「道徳の教科化にむけての小・中学校教員のニーズ調査」『神田外語大学紀要』29 号、507-529 頁
- 小柴孝子・武田明典・村瀬公胤 (2016) 「新教員免許状更新講習 (選択必修領域) についてのニーズ調査」『神田外語大学紀要』28 号、171-191 頁
- 杉村美佳 (2013) 「多国籍化する小中学校における国際理解教育の現状と課題: 神奈

- 川島西部の教師アンケート調査結果の分析を中心に』『上智大学短期大学部紀要』33号、1-12頁
- 武寛子(2010)「グローバルな視野育成の授業実践に対する認識:日本の中学校教師を焦点に」『六甲台論集:国際協力研究編』11号、45-63頁
- 徳永保・舂井圭子(2011)『グローバル人材育成のための大学評価指標:大学はグローバル展開企業の要請に応えられるか』協同出版
- 日本学校教育学会「グローバル時代の学校教育」編集委員会・多田孝志・和井田清司・黒田友紀(2013)『グローバル時代の学校教育』三恵社
- 八王子市民活動推進部国際交流課(2013)「国際理解教育プログラム作成に関するアンケート調査報告書」http://www.city.hachioji.tokyo.jp/kurashi/shimin/004/001/p000095_d/fil/kokusairikaiprg-anketo.pdf
- ベネッセ教育総合研究所(2016)『中高の英語指導に関する実態調査2015』ベネッセ教育総合研究所グローバル教育研究室
- 藤本学・大坊郁夫(2007)「コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み」『パーソナリティ研究』15号、347-361頁
- 前田洋一・西村公孝(2013)「グローバル社会時代に必要な資質・能力の分析」『鳴門教育大学研究紀要』28巻、126-135頁
- 文部科学省(2013)「第二期教育振興基本計画」2013年6月14日閣議決定http://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/detail/_icsFiles/afieldfile/2013/06/14/1336379_02_1.pdf
- 文部科学省(2014)「英語教育の在り方に関する有識者会議」http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/
- 文部科学省(2016)「平成27年度「英語教育実施状況調査」の結果について」http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/1369258.htm
- 矢嶋和江・一場かおり・川島麻紀・鈴木智子・西村映里奈(2003)「教育現場における国際化の導入状況と教員の国際化教育に関する意識調査」『群馬パース学園短期大学紀要』5巻、2号、11-22頁
- 米田伸次・岡崎裕・高尾隆(2006)「現場教師を対象とした国際理解教育の実態調査」日本国際理解教育学会編『グローバル時代に対応した国際理解教育のカリキュラム開発に関する理論的実践的研究』文部科学省科学学術研究費補助金事業報告書(基盤研究(B)研究課題番号15330195、研究代表者:多田孝志)1-36頁

Appendix 1: グローバル教育の7構成要素: 97項目リスト

1. 国際感覚・異文化理解

異文化に対して寛容的な態度で接している; 異文化に興味関心を寄せている; 街中で困っている外国人がいたら、援助しようと心がけている; 他国の文化歴史に対し

グローバル教育尺度開発の試み

て偏見なく理解しようとしている； 自国と他国を比較した際に、他国のことも尊重している； ネット上の極端な国別の意見に対して、一定の距離を置いて理解できる； 文化、価値観、考えの違いを当然と受け止められる¹⁾； 外国人を道案内できる； 海外に観光旅行に行くことがある； 海外で活躍している日本人を知っている； 海外の大学(院)に留学する； 海外インターンシップ・語学研修に参加する； 海外でボランティアをする； 外資系や国際的企業の海外関係部門で働く²⁾； 国際的組織(国連など)の職員として働く； 開発途上国支援を主な業務とする組織の職員として働く

2. 日本人のアイデンティティ

日本の文化をよく理解している； 日本人としての誇りを持っている； 日本の歴史・地理についてよく理解している； 郷土への愛着を感じている； 郷土の民芸・歴史・文化を伝承していく； 日本の文化が世界に広まるように努力する； 日本人がスポーツ、音楽、ビジネスなど、世界で活躍する； 日本の名所を外国語で紹介できる； 自分の住んでいるところを紹介できる； 日本の昔ながらの伝統・習慣を大事にしている

3. 語学力・コミュニケーション・スキル

日本語運営能力を備えている； 外国で就労や勉学を行えるだけの英語運営能力を備えている； その場に即した言動を心がけている； 共感的な態度で他人の話を聴くことができている； 初対面の人にも自分から話しかけることができている； 他者とのコミュニケーションを大切にしている； 他人の意見を尊重し、良い所を取り入れようとしている； 他の人に自分の考えをわかりやすく説明できる； 相手の立場や気持ちを考えて話すことができる； 外国語で自由に討論できるようになる； 外国の歌を原曲で歌うことができる； 外国で買い物することができる； 外国語で尋ねられたことに対して適切に応答することができる； 外国語を使ってスピーチできる； 英検などを積極的に受けることができる； ブログなどで自分の考えを発信できる； 外国の映画を見てあらすじを説明できる

4. 知識・教養・思考

幅広い教養を備えている； 世界の地理・歴史について、一通り理解できている； 書籍や新聞を定期的に読んでいる； いろいろなことを学習することを好んでいる； 社会問題について日頃、考えている； 内省的な思考を心がけている； クリティカルシンキングの態度で物事を分析できている； 論理的思考が出来ている； 多角的な視点で物事を分析することができる； 洞察的な態度で考えることができている； 共同体としての世界や地球という視点でものごとが考えられる³⁾； 辞書を上手に活用できる； 伝言や手紙などを読んで、その内容に合わせて適切に応じることができる； 外国のニュースの概要や要点を聞き取ることができる； ボランティア体験したことがある

5. 創造性・遂行力

ユニークな発想を展開することができる； 個性的な発想を行っている； 趣味や

特技を持っている；日頃から自分だけの創作活動を行う時間を確保している；諦めずに物事を遂行できている；粘り強い精神を備えている；健康に留意し、自律的に生活することができている；責任感が強く、引き受けた仕事は最後までやり遂げることができる；人とはちがった視点で物事を捉える方だ；新しいアイデアをよく思いつく；思いついたことはすぐに実行に移している；目標を設定し、達成に向けて着実に進むことができる；間違えることを恐れずに自分の考えを話す；与えられたテーマについて自分の意見・主張を話すことができる

6. リーダーシップ・協調性

主体的に物事を遂行できている；皆と協力して物事を遂行できている；自分の意見と他人の意見を聞くことができている；積極的に物事に取り組むことができている；他者への気配りができている；社会生活における道徳心を備えている；グループで活動するときはリーダーシップを発揮している；意見や考えの違う人たちを説得してまとめることができる；他人からの指摘を素直に聞き入れて改めることができる；相手によって臨機応変に対応することができる；他の人が苦手だと思ふような人とも上手くやっていける；グループ内の役割分担ができる

7. 情報機器操作

IT機器の基礎知識を習得できている；コンピュータ操作ができている；効果的にソフトを上手く使いこなすことができている；プレゼンテーションを行う際に情報機器を活用することができる；コンピュータを活用し他者へ情報を発信できている；コンピュータ操作が苦手な者に、分かり易く説明できている；メディアリテラシーについての知識や問題点をよく理解できている；インターネットを使って様々なことを調べることができる(情報収集能力)；たくさんある情報の中から、自分の必要とする情報を取捨選択できる；情報社会での一員としてルールやマナーを守って情報を受発信できる；インターネットを利用する際に、情報の正しさや安全性を理解し活用することができる；相手や状況によってメールの内容や表現を適切に使い分けることができる⁴⁾；状況に応じてコミュニケーション手段(メール、電話、口頭など)を使い分けることができる⁵⁾

Appendix の注

- 1) 加賀美常美代・篠塚英子(2007)「大学生の国際交流意識とグローバル教育：お茶の水大学の場合」、お茶の水女子大学人文科学研究 2007-03 P. 173-188 から引用・加筆修正を行った。
- 2) 同上。
- 3) 同上。
- 4) 総務省(2010)「ICTメディアリテラシー育成に関する 指導内容等についての調査研究平成22年度 総務省(平成23年3月)育成テーマ：メールによるコ

グローバル教育尺度開発の試み

コミュニケーション (指導資料 P. 17)

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/kyouiku_johoka/pdf/tpo_study_guidance_data.pdf を参考に作成した。

5) 同上。